

国際P2M学会 第5回研究発表大会
「企業の社会的責任とプロジェクト・プログラムマネジメント
—経営理念から実践的問題解決への組織的方法論を探る—
盛況に終わる

2008年9月19日（金）に東京神田神保町の日本工業大学大学院で開催された 国際P2M学会秋季研究発表大会について
ご報告いたします。

2008年秋季研究発表大会の協力御礼と総括のご報告

平成20年9月23日

実行委員長 小原重信



台風13号が九州に上陸し、風雨が心配される天候の中で、9月19日に第5回の
秋季研究発表大会が日本工業大学神保町キャンパスで開催されました。

幸い降雨による交通渋滞もなく、海外講演から帰国された吉田邦夫学会会長を
お迎えして、計画予定に従い大会を運営して初期の目的を達成することができました。

この成功も皆様会員、関係者、実行委員の皆様の絶大なご協力の結集成果であり、心より御礼申し上げます。

本年度の前半は、世界的な資源競争、米国の金融バブル、北京オリンピック、洞爺湖サミットに遭遇した時期
でもありました。このような激変する環境のもとで、行政や民間の企業体が「社会的責任」を経営理念として
再認識することは極めて大切です。さらに、企業の管理者は、革新的な政策や戦略を立案し、プロジェクトや
プログラムマネジャーには、個別ミッションを実現する知恵が期待されています。実行委員会は、そのような
意識を鮮明にして、経営理念から実践的問題解決への組織的方法論を探る教示を求めて、基調講演、ワークシ
ョップ、論文公募を企画いたしました。



基調講演の久米社長をご紹介します
吉田邦夫会長

久米繊維株式会社三代目の久米信行社長のご講演は、「企業の社会的責任：機能×環境×文化品質を追求する」のテーマにより行われました。機能、環境、文化は、事業製品と社会的責任を構成する要素ですが、コストとトレードオフすると考えられ断念される場合が多数です。社長は、停滞する繊維業界にあって、参加型有機栽培綿のTシャツなど独自の環境経営で大変有名です。久米社長は、豊かな感性、自然共生の発想、斬新なイベントを多数のプロジェクトやプログラムに企画されています。この事例を巧みな解説と映像で紹介され、後半では、体系的な論理を入れて解説されました。理念と事業の調和を実践する内容に、参加者の皆様も圧倒された思いでした。

ワークショップは、学会事務局の石川千尋氏の司会と日本工業大学大学院の武富為嗣教授のコーディネーターにより開催されました。その内容は「プロジェクト・プログラム」における「社会調和と持続的成長」にフォーカスした実践的な討議となりました。東京農工大学の亀山 秀雄教授は、大学院で研究生が取り組む多数の研究開発プロジェクトを全体としてプログラム管理されています。さらに大学が推進する産学連携の推進は、中小企業の新産業創造や活性化で重要です。教授は、実際に開発したアルマイト触媒を特許化して有毒揮発性ガス除去の技術移転、インキュベーション、事業化で成果を挙げている実績紹介され、会員の皆様も深い教示を受けたことでしょう。株式会社ディグの杉井康之社長は、印刷業における「環境経営」で著名な方です。社長は2005年を環境元年として、全社の取り組みをされています。環境理念、法令順守、年度目標達成、コミュニケーション、環境報告などの実践体系を解説されました。とりわけ、「エコアクション21」の全体意識活動やITシステムとデータによる炭酸ガス削減、印刷工程で利用される有機物質削減など定量目標のフェーズ別管理にも注目が集まりました。

お蔭様で昨年度から春季と秋季の年度2回の大会を実現し、会員の「研究発表の機会」を充実できて大変喜んでおります。今回は「戦略と組織」（白井久美子座長）、「感性」（相原憲一座長）、「開発」（梅田富雄座長）の3つのトラックを企画することができました。多数の論文投稿をされた会員の皆様と、座長の労を取られた皆様に御礼申し上げます。また、進行支援と時間管理にご協力いただいた千葉工業大学西尾雅年研究室の学生の皆様に御礼申し上げます。

皆様のご協力を深謝し、来年度春季大会もよろしくご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。



会場（日本工大）受付にお越しの会員の皆様

【秋季研究発表大会の内容】

会場	A会場	B会場	C会場
	3F 多目的ホール	8F 801号室	6F 602号室
研究発表	戦略と組織トラック	感性トラック	開発トラック
座長	白井久美子	相原憲一	梅田富雄
10:00-10:30	A-1：小松昭英 製業企業のビジネスアセスメント	B-1：鷹野聡 CRMにおけるバリューマネジメント～顧客調査の位置づけ～	C-1：樋口峻彦, 篠原慶太, 佐藤亮太, 西尾雅年 社会人基礎力に基づくDOA教育プロジェクトにおけるBSC評価
10:30-11:00	A-2：渡辺貢成 プラント系エンジニアリング企業の組織能力のIT業界への適用	B-2：相原憲一 プロシューマ時代の感性バリュープロポジション	C-2：山口径, 西尾雅年, 古澤卓也 大学教育のゼミ運営におけるプロファイリング事例
11:00-11:30	A-3：清水基夫 複雑性とマネジメント:事業戦略に意味するもの	B-3：小松昭英 製造業のサービス化・感性化	C-3：岩下幸功 プロファイリングマネジメントとシステムズアプローチ 再考
11:30-12:00	A-4：(Jorge) Tatsushi Takata Mobile Business Value Chain Change with New Service Platform	B-4：菊池隆, 鴨志田晃 数智化社会における日本企業の社会的責任—日本企業にとって必要なCSRとは	C-4：長谷川泰司, 西尾雅年 プログラム/プロジェクト管理におけるメタデータの活用
12:00-12:50	昼休み (12:10-12:50 理事会)		
12:50-13:50	【会場: 3F 多目的ホール】 ワークショップ 「企業のプログラム・プロジェクトの実践、社会調和、持続的成長(Sustainable Growth)」 コーディネータ兼パネラー: 武富 為嗣 コーポレート・インテリジェンス(株)代表取締役社長 日本工業大学大学院技術経営研究科教授 パネラー(順不同): 亀山 秀雄 東京農工大学工学部大学院技術経営研究科教授 杉井 康之 株式会社ディグ 代表取締役 司会: 石川 千尋 国際P2M学会 企画運営担当		
13:50-14:00	移動時間		
14:00-14:30	A-5：岡崎昭仁 ハイブリッド車用蓄電装置の技術開発戦略	B-5：堀田大輔, 越山修, 山田隆志, 吉川厚, 山本秀男, 寺野隆雄 気づきを誘発する他者の視点の推薦方式の検討—マンガ教材を題材として—	C-5：梅田富雄 プロジェクトに関わるシステムエンジニアリング方法論の展開
14:30-15:00	A-6：野間口隆郎 P2MとERP導入プロジェクトにおける組織変革マネジメント	B-6：山本秀男, 吉川厚, 小川美香子, 折田明子 マンガ教材を用いたアドバンスド・ケース研修の構想	C-6：木下俊彦 技術移転と制度文化
15:00-15:15	休憩 15分 コーヒーブレイク		
15:15-16:15	【会場: 3F 多目的ホール】 年次総会		
16:15-16:30	休憩		
16:30-16:45	【会場: 3F 多目的ホール】 学会会長挨拶: 東京大学名誉教授 吉田邦夫		
16:45-18:15	【会場: 3F 多目的ホール】 基調講演: 久米繊維工業株式会社 代表取締役社長 久米 信行 氏 「企業の社会的責任: 機能×環境×文化品質を追求する」(仮題) ～日本でこそ作りえるTシャツを世界に、未来の子供たちへ～		
18:45-20:45	懇親会 (於: 如水会館)		

<<大会報告の部>>

■□■ 基調講演 ■□■

「企業の社会的責任：

機能×環境×文化品質を追求する」

～日本でこそ作りえるTシャツを世界に、
未来の子供たちへ～

久米繊維工業株式会社 代表取締役社長
久米 信行 氏



久米氏から、これまで地球環境と日本の伝統文化およびポップカルチャーの維持発展を推進しているボランティア活動に注目してきたこととその詳細について映像をまじえたご報告があった。ブログやSNSなどの情報技術（IT）を存分に活用して、ビジネスに限らずあらゆる方面でプラスの影響を与え合うような人たちとのネットワーク構築に注力してきたとのご紹介があった。

LOHAPAS (Lifestyle Of Health, Art, Smile, Peace And Sustainability)というライフスタイルを追求している久米氏、多くの公共的な活動にも貢献し、幾多の表彰も受けてきたとのことであった。

【講師ご紹介】

1963年東京墨田区生まれ。慶應義塾大学 経済学部卒業。1935年創業の国産Tシャツメーカー三代目。日本でこそ作りえるTシャツを求道して、特別な着心地と耐久性を誇る商品品質に加え、グリーン電力とオーガニックコットンを用いた環境品質、JAPAN COOL を体現した和とモダンなデザインやプロシューマーを支援する。文化品質を追求し、あくまでも国内自社工場でのTシャツ生産を続ける。1997年Tシャツ製販サイトT-GALAXY.COMで日経インターネットアワード。2005年経済産業省 IT経営応援隊「IT経営百選」最優秀賞受賞。その道のプロに聴く人気サイトAllAboutのTシャツガイド、NPO法人日本オーガニックコットン協会広報委員として有機栽培綿の普及。和綿を無農薬で生産する「しあわせのコットンボール」で畑仕事を実践中。1億人のグリーンパワー呼びかけ人としてグリーン電力の普及。NPO/NGO法人や日本を元気にする人をブログなどネットで応援するNPO法人CANPANセンター理事。CANPANブログ大賞 審査委員長。その他、メール&ブログマーケティングの(株)カレン 社外取締役、東京商工会議所 墨田支部 IT分科会長 墨田ブランドアップ推進会議委員、明治大学商学部「ブログ起業論」講師

経営者会報ブログ 久米繊維工業株式会社

<http://kume.keikai.topblog.jp>



参加者のみなさん



自社製のTシャツを着て熱く語る久米社長



懇親会にもご出席された久米社長のスピーチ

【学会の推薦図書ご紹介】

考えすぎて動けない人のための「すぐやる!」技術

久米 信行著 日本実業出版社刊 定価：1260円（税込）平成20年9月1日発刊

～学会からの推薦文～

著者は、本学会がお招きした秋季大会（平成20年9月19日）の「企業の社会的責任：機能×環境×文化品質を追求する」の基調講演者でもある。本著は学術書ではないが、明治大学商学部の「ベンチャービジネス論」講義の集録であり、P2Mが重視する問題発見から解決行動の流れを教示する実践的な指南書でもある。会員には是非一読を薦めたい。スピードと成功を劇的に向上させる「自分で自分の背を押す」31の方法は、「すぐやる技術」が平易に図入りで解説されている。・・・

続きはこちら >><http://www.iap2m.jp/cgi-bin/repo/note.cgi?num=30>



■□■ ワークショップ ■□■

大会プログラムの午後のセッションとして、コーディネータに武富為嗣氏、パネラーに亀山 秀雄氏、杉井 康之氏を迎え、ワークショップが開催された。最初にそれぞれの立場からの CSR に関する報告があり、その後、開場参加者との質疑応答が行われた。

* * *

「企業のプログラム・プロジェクトの実践、 社会調和、持続的成長 (Sustainable Growth)」

【報告者：武富為嗣】

司会：石川千尋、コーディネータ：武富為嗣、
パネラー：亀山 秀雄、杉井 康之



左より：亀山教授、杉井氏、武富教授、司会の石川

企業の社会調和と、持続的な成長というタイトルで、日本ユニシスの石川さんの司会のもと、東京農工大学、亀山教授、株式会社ディグの杉井社長、コーポレート・インテリジェンスの武富で、問題提起を行った。

亀山教授からは、大学と教授が関係する新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) での研究開発と環境問題への取り組みについての紹介があった。最初は環境問題として捉えていたものが、環境ビジネスとして経営に取り込み、それを環境戦略として発展させて行く過程の実際的な流れについての説明がありました。

杉井社長は、創業90年になろうかという印刷会社の社長として、ITを活用した環境経営の実践についての紹介がありました。環境問題をマイナスのイメージで捉えるのではなく、積極的に対応することによって、他社との差別化と自社のブランドを確立する経営の実践と、ITを活用した、業務の効率化、顧客サービスの向上、省エネの実現を実践している現状の紹介とその重要性の話がありました。

最後に武富より、社会調和には、環境、安全、家庭、内部統制などの要素を考えながら、これらをコストやリスクとして捉えるのではなく、競争力強化とブランド確立の方策として、戦略的に取り組むことが重要であり、それが持続的な成長につながるとの段階を追ったアプローチの説明がなされました。

会場からは、社会調和の一環として、残業などを減らすのと、残業をすることで、給与を確保しようとする従業員の行動との関係をどう調和させているのだなどの具体的な質問が出ました。短い時間で、全体として時間が足りなかったのですが、この問題は、簡単に答えの出る問題ではないので、今後の活発な議論や研究が期待されるようです。



参加者の皆様



パネラーとコーディネータ



亀山教授の発表を聞く大会参加者



杉井氏による自社の環境マネジメントの報告



武富教授

◆ 登壇者プロフィール ◆

コーディネータ兼パネラー:

コーポレート・インテリジェンス(株) 代表取締役社長

日本工業大学大学院技術経営研究科教授 武富 為嗣

パネラー(順不同):

東京農工大学工学部大学院 技術経営研究科教授 亀山 秀雄

株式会社ディグ 代表取締役社長 杉井 康之

■□■ 個別研究発表 ■□■

◆◆◆ 戦略と組織トラック ◆◆◆

【報告者： 座長 白井久美子】

経営理念から実践的問題解決への組織的方法論を探る際に真っ先に語られるべきものに戦略や組織というものがある。本トラックでは、製薬、プラント、自動車、通信、IT業界における事業戦略、組織戦略、技術開発戦略、サービス・プラットフォーム戦略など、6件の論文発表があり活況を呈した。

小松昭英(静岡学院大学)は、製薬企業のビジネスアセスメントとして、製薬企業における設備投資や情報投資に関する投資効果の事後評価にもとづき、その投資効果と事業系統図を含む事業内容や関係会社状況との関連について研究・分析結果を報告した。製薬ビジネスアーキテクチャの特長は、研究・開発アーキテクチャにあり、企業業績は設備投資や情報投資に大きく依存するわけではなく研究開発投資に依存する、製薬企業におけるビジネス的な付加価値・利益は、技術・商品価値に依存する、と考察した。

渡辺貢成(PMAJ)からは、プラント系エンジニアリング企業の組織能力のIT業界への適用として、P2MプロファイリングマネジメントによりIT関連プロジェクトが抱える問題を“ありのままの姿”として浮き彫りにし、PMスタンダードとの相違を突き止め、エンジニアリング的視点とマネジメント的視点の両面でのように対応・解決すべきかを考察、IT関連プロジェクトの組織能力をいかにして向上するか、その方策提案がなされた。IT企業の人手不足、高い失敗率、脱3K化政策に頭を悩ます業界関係者には大変興味深く示唆に富む内容であった。

清水基夫(名古屋産業科学研究所)は、複雑性とマネジメント:事業戦略へ意味するものとして、マネジャが直面する3種の複雑性とは、詳細化の複雑性があるターゲットシステム、動的

複雑性がある組織や環境であると言及し、複雑性とマネジメントの関係について考察した。複雑性に対処する企業戦略の方向性は、変動に対して適切な反応をするプログラムマネジメントにおけるオプション戦略やシナリオプランニング、環境変動の影響を軽減する事業分野フォーカス戦略や競争排除、複雑性利用の3つであると示唆した。

(Jorge) Tatsushi Takata(横浜国立大学国際社会科学研究所)は、Mobile Business Value Chain Change with New Service Platform として、モバイルビジネスにおけるサービス・プラットフォームを活用することによる新たな価値提案、パラダイムシフト、バリューチェーンの変化に関する分析報告があった。携帯電話市場ではプラットフォームがクローズドからオープンへ、ビジネスは垂直統合から水平分解モデルへとパラダイムシフト、サービスはモバイルからWebサービスへと移行、バリューチェーン変化にともない競争が業界内から業界外へとシフトしていると結論付けた。

岡崎昭仁(日本工業大学専門職大学院技術経営研究科)は、ハイブリッド専用蓄電装置の技術開発戦略として、トラック/バス大型商用車市場むけのハイブリッド車に搭載する最適な蓄電装置の検討と普及を目的とする技術開発戦略の策定について実践的なアプローチを提案した。大型商用ハイブリッド車むけの蓄電装置の開発は、地球温暖化対策現実解の1つとして重要であり、社会的に意義深く戦略的な提案と言える。

野間口隆郎(SAPジャパン・ビジネスコンサルティング本部、筑波大学大学院)は、P2MとERP導入プロジェクトにおける組織変革マネジメントとして、ERP導入企業の現場に眠っているエネルギーを引き出し優れた経営戦略を支える優れた組織、業務、ITを構築するためのプロジェクト組織変革マネジメントを紹介し、その重要性を考察した。ERPを適用する戦略実現プロジェクトを実施するプロジェクトマネジャやPMOメンバにとって非常に示唆に富む内容であったと言える。

【戦略と組織トラック 発表者と論文テーマ】

- A-1 : 小松昭英 : 製薬企業のビジネスアセスメント
- A-2 : 渡辺貢成 : プラント系エンジニアリング企業の組織能力の IT 業界への適用
- A-3 : 清水基夫 : 複雑性とマネジメント : 事業戦略に意味するもの
- A-4 : (Jorge) Tatsushi Takata : Mobile Business Value Chain Change with New Service Platform
- A-5 : 岡崎昭仁 : ハイブリッド車用蓄電装置の技術開発戦略
- A-6 : 野間口隆郎 : P2M と ERP 導入プロジェクトにおける組織変革マネジメント



戦略と組織トラック 発表者の皆さん

◆◆◆ 感性トラック ◆◆◆

【報告者：座長 相原憲一】

人間社会における事業開発価値を生み出す源泉である「人間力」とその結果としての生み出された商品などの「社会的整合性」とが注目されている。本トラックではP2Mフレームワークとして、顧客共感、能力開発、社会的責任などの大きな視点から6件の発表があり、活発な討論が展開された。

鴈野聡（ジーフィールド社）からは、CRMにおけるバリューマネジメントとして日ごろの実績を踏まえた顧客調査の位置づけの提案があった。彼はP2Mのフレームワークで戦略的な顧客価値の発掘が必須であると主張した。討論では、顧客価値の抽出を目指すデータマイニング手法の限界もあり、その延長で具体的なペルソナを描くことの課題を中心にそれを補完するための顧客調査の必要性が一層必要との意見の一致があった。

相原憲一（静岡大学）からは、生産者側と購買者側との協働であるプロシューマ時代の感性バリュープロポジションの二次元的モデリングと創出と持続を生む仕組みが提案された。そして数多くの事例分析が紹介された。討論では生産者側が目指すバリュー創出の狙い、購買者のセグメント化、そして社会的整合性などを加味して三次元的な空間モデリングを目指すことがより有効性が一層顕著になるとの指摘があった。

小松昭英（静岡大学）からは、製造業のサービス提供が迫られている中でさらに一歩進めて感性の時代を踏まえたビジネスアセスメントの必要性が問題提起された。全製造業に対するデータ分析によりサービス化、感性化の進展し

ている企業の優位性を推定した。討論では事例分析をとおして事業内容とビジネスアーキテクチャを通したビジネスデザインのあり方が重要であることが推察できたので一歩進めて研究する意義の一致があった。

菊池隆（東工大）からは、叡智化社会における日本企業の社会的責任（CSR）の根幹には企業の提供サービスが社会的責任を全うしているか否かという問題があるとの提示がなされた。発表では工業化社会から叡智化社会への歴史的変遷を背景にして日本企業の生き残り策の視点からCSRを論じた。討論ではCSRには企業哲学が必要であり、いかなる仕組みづくりをすべきかその叡智の表出が重要であるとの認識が確認された。

堀田大輔（東工大）と山本秀男（中央大学）からは、マンガ教材をテーマにした検討報告がなされた。堀田は気づきを誘発する他者の視点からの推薦方式の定量的結果を報告した。気づくことは他者の異なる学習経験に大きく左右される場合が多いことを仮設とし、実験によりひとつの結論が得られた。討論ではより多様な実験環境での検証を進める意義が確認された。山本はマンガ教材を用いたアドバンスト・ケース研修の構想を従来のケース教育と比較して提示した。擬似体験や討論をフィードバックさせて文脈理解力や創造力を高めるのが目的であり実践知の伝達や教育に活用が期待できるとした。討論では気づく行為からビジネストークまでのシナリオ作りの多様化に期待したいとの発言があった。

本トラックでの発表を通して、基本的に多様な人間力の相乗効果、言い換えれば感性の豊かさがP2Mのフレームワークに必要とされる時代認識であるとの一致を得た。

【感性トラック発表者と論文テーマ】

- B-1：鴈野聡：CRMにおけるバリューマネジメント～顧客調査の位置づけ～
- B-2：相原憲一：プロシューマ時代の感性バリュープロポジション
- B-3：小松昭英：製造業のサービス化・感性化
- B-4：菊池隆 鴨志田晃：叡智化社会における日本企業の社会的責任—日本企業にとって必要なCSRとは
- B-5：堀田大輔,越山修,山田隆志,吉川厚,山本秀男,寺野隆雄：
気づきを誘発する他者の視点の推薦方式の検討—マンガ教材を題材として—
- B-6：山本秀男,吉川厚,小川美香子,折田明子：マンガ教材を用いたアドバンスト・ケース研修の構想



感性トラック 発表者のみなさん

◆◆◆ 開発トラック ◆◆◆

【報告者：座長 梅田富雄】

最初の2つの報告C-1,C-2は同じ研究機関で行われ、重要課題である社会人基礎力の養成に基づき、大学教育においてゼミや演習を通して社会人基礎力の修得についての教育プロジェクトを発足させ、実施した結果について報告された。C-1の発表は、組織体制、育成プログラム-DOAの本質の理解-を設計し、BSCの4つの視点を教育プログラムの戦略目標と関連付け、KPIによって評価する方法がとられ、アンケート調査による学習結果の自己評価が行われた。

C-2の発表は、ゼミ演習、卒業研究などを教育プロジェクトとして、TOC思考を使って受講生の改善方向を示唆する方法、教育プロセスの問題の構造化、現状課題の解決方法がとられ、研究室を中心とする諸活動の有効性を明らかにするために行われたミッションプロファイリングによるシナリオ作成事例が報告された。社会人基礎力と教育プロジェクトの関係が明示的でなかったこともあり、関連質問やコメントがあったが、両発表から学生の自覚を促し、社会人基礎力の向上に役立つ結果が出された状況を知ることができた。

C-3の発表は、先回の大会での報告に続いて、(SSM+APM)モデルからP2Mへのインプリケーションについて、既発表内容、プロファイリングについての概要説明に続き、システムズプロファイリングモデルの提唱がなされた。SSMのフレームワークにおける現実世界と概念思考の関係を反転させ、SSMのステージ1,2をAs-Isモデルに、ステージ

3,4をTo-Beモデルに、ステージ5,6,7を両者間のギャップ分析として関連付けたシステムプロファイリングに織り込んだインプリケーションが示された。製品開発の構想から上市までを対象としたプロファイリングに対する重要な提案であると判断されるが、適用可能性をめぐる質問を通して一般化は今後の課題として残されたように思う。

C-5の発表は、システムエンジニアリングとプロジェクトマネジメントの相互関係について、A.D.Hallの形態学的フレームワークに代表されるシステムエンジニアリングの概念形成とプロジェクト運用の経緯から、プロジェクトのテキストでシステムエンジニアリングが行われてきたことに着目し、価値連鎖活動における諸活動をシステムエンジニアリングに、支援活動をプロジェクトマネジメントによって実施すること、A.D.Hallの形態学的フレームワークの新たなバージョンの提言などが行われた。システムエンジニアリングには価値前提が含まれる否かについての質問、討議が行われた。

C-6では、グローバル化時代の日本企業がアジアで直面している経営課題について、アジアの生産現場への技術移転に日本本社からの人材派遣に依存している現状がコスト面その他から全体最適化に対する新たな対応が求められているとの問題提起がなされた。具体例として松下電器産業の中国やベトナムにおける社内大学の設置による人材育成を取り上げ背景にある文化の違いの克服なども含め、新たな仕組みづくりが必要との提言がなされた。また、アジアにおける日本企業の戦略やMOT教育についても言及されたが時間の制約から詳細な議論ができなかったことは残念であった。

【開発トラック発表者と論文テーマ】

- C-1：樋口峻彦,篠原慶太,佐藤亮太,西尾雅年：社会人基礎力に基づく DOA 教育プロジェクトにおける BSC 評価
- C-2：山口径 西尾雅年古澤卓也：大学教育のゼミ運営におけるプロファイリング事例
- C-3：岩下幸功：プロファイリングマネジメントとシステムズアプローチ 再考
- C-4：長谷川泰司,西尾雅年：プログラム/プロジェクト管理におけるメタデータの活用
- C-5：梅田富雄：プロジェクトに関わるシステムエンジニアリング方法論の展開
- C-6：木下俊彦：技術移転と制度文化



開発トラック発表者と座長

<<ユーザボイスの部>>

杉井 康之 様 (株式会社ディグ)

このたびは国際P2M学会への入会と、ワークショップにおいてパネラーとして参加させていただきありがとうございました。今回の題目は、「企業のプログラム・プロジェクトの実践、社会調和、持続的成長」でしたが、これまではコスト増を招くと考えられる社会調和は、企業の存続と相反するとされてきましたが、今後は各社が独自のアイデアを駆使することにより、その両立を行うことが必須となると思います。今回のワークショップ参加で、研究会に参加なさっている方からの意見でその思いを強くいたしました。

今後も環境経営マネジメントという観点から活動を行っていこうと考えていますので、学会の方々からのご指導を賜るようお願いしたいと存じます。

岡崎 昭仁 様

(日本工業大学 専門職大学院 技術経営研究科)

春の大会に続いて、今回は企業実務的な戦略提案を投稿した。本稿のように具体的な戦略提案の文献は少ない。しかし、今回の報告では会場からの反響は決して高くはなかった。秘匿の面があり、歯抜けになった感じもあるが、環境対策車へのアプローチとして時代には合っている内容である。今後、金融ショックに陥った米国に対して、技術立国日本が国際的な優位性を提示するには、企業各々にマッチした実務的な戦略提案事例が数多く発表されることを望むものである。これから、いかに会員を増やして、裾野を広げるかが学会活動のキーになると思う。



懇親会で交流を深める会員

菅谷 茂 様 (住商情報システム)

国際P2M学会には、設立当初から発表大会運営サポート、論文投稿及び発表等、積極的に参加させて頂いております。学生時代にP2Mと出会ってから約4年が立ち、P2Mの知識及び思想の習得に励んでまいりました。会を増す毎に発表会は様々な分野の先生が参加され、向上心・知的好奇心を刺激する良き場となっております。

今回開催された発表会ではワークショップ、基調講演ともに中小規模の組織におけるプロジェクトの実践的な内容が紹介され、大変ためになる有意義な時間を過ごせたと感じております。

学生から社会人となり、IT業界に身を投じてまだまだ日が浅いのですが、P2Mの知識、思想を意識し、様々な現場にて経験や実践力を身に付けていきたいと思うとともに、P2Mの今後の発展に何らかの形で貢献できればと思っております。

新聞 一男 様

(神奈川工科大学情報学部 情報工学科 学生)

経営工学に関する知識があまりない状態で参加してしまい、講演の内容を理解できない部分が多くてもったいないことをしてしまったのが今回の講演を聞いて一番に感じたことでした。でも、いろいろな考えや知識を聞くことができよかったです。

今後にもこのような講演に参加する機会があるのなら、その分野に関する基本的な知識を少しでも身につけてから参加するようにして、時間を有効的に活用していきたいと思いました。

発行日：2008年9月30日

発行者：国際プロジェクト&プログラムマネジメント学会
秋季研究発表大会 実行委員会

本掲載記事にお問い合わせがある場合は以下をご利用ください。

http://www.iap2m.jp/p2m_inquiry.html